学 位 論 文 要 旨

氏 名 平 田 光 彦

題 目 書と書教育における美の構図

本研究は「美」を観点として、書写教育と書道教育の接続を捉え直すこと、そして書写と書道それぞれの内容を捉え直す研究である。ここで「美」の語で表すのは、広義の美、すなわち広く美的なこと一般に関わる内容である。研究は、書写教育を論じる第1部と、書道教育を論じる第2部とで、主に構成されている。書写と書道は、文字を書くことの学びとして本来は一つの分野としてのまとまりを持ちうるが、学校教育においては、小・中学校国語科の書写と、高等学校芸術科の書道として、校種と教科を跨ぐ関係にある。これを一つなぎに論じるのが本研究の全体像である。

第1部は、小中学校国語科に位置する「書写」の内容に「美と個性」を穏当に位置付けることを目的とした。第1章は、問題をめぐる経緯を論じた。昭和43年の学習指導要領改訂に際して書写の学習内容が同33年の「正しく美しく」から「正しく整えて」に変更されたことを一つの契機として、国語科書写を「用」、芸術科書道を「美」とする位置付けが整理された。これにより書写における「美」は、その位置付けや範囲の曖昧な状況が続いている。書写における「美」の位置付けは、なぜその字形を学習するのかという学習の根拠や学習者の書字が自然と纏う個性とも関わる問題である。第2章では、書写の学習内容に「美」がすでに含まれていること、そしてそれがどのように現れているのかを実証的に検討するために、感性評価を用いた研究をおこなった。因子得点の算出には、精度の高い統計理論である項目反応理論を用いた。研究の結果、書写の学習内容が単なる整いではなく、整齊を基調とした美であることが示された。また、毛筆の特性が字形の根拠となっていること、個性につながる書風が、表現の位相の違いをもたらすが、美的な価値には違いを生じないことなどが分かった。第2章の総合考察では、ここで得た実証的な知見を第3章で活用するために、美の教示に関する美学的な検討を加えた。第3章は、これらの知見を元に、書写における美の具体的な内容、および書写と書道の接続を論じた。また、書写の美が毛筆の特性に依拠することから、毛筆の学びを硬筆に生かすための硬毛の双方向アプローチによる実践を提案し、成果の検証もおこなった。書写と書道の接続の捉え直しには、線を感性的に捉えることが、高等学校の書道に向けた「感性の萌芽」となることを示した。更に、ロラン・バルトのテキスト理論を援用して、国語科で言語運用の共通の基盤として学習する「正しく整えて書く」ことが、すでに美を含むことを確認し、この段階を「ラング」に、そして無意識に表出される書き振りの「個性」を「スタイル」に位置付けて、これを書写の学習の範囲とした。そして、表現の意図を主体的に持つ段階で、表現の効果と合わせて学ぶ技法から、ねらいとする書風に適うものを選択して表現するところを「エクリチュール」に位置付けて、これを書道の範囲に至るものとした。

第2部は、第1部の書写と書道の接続において論じた、筆意の在り方に関する議論を引き継いだ。筆意には、卒意と用意という観点がある。第1章では、この概念に対して、東洋芸術の書画論を踏まえた上で、そこに創造性の観点や認知心理学の知見を用いることで、芸術教育における捉え直しを図った。第2章と第3章は、書の理論的研究であり、名筆とされる古典を対象として、筆意と表現の研究を行なった。書表現の探求に基づく主観的な感覚や知識と、第1部の理論的な知見とを結びつけて、書き手の美的な感覚を分析的に論じた。第2章では、書かれている線や文字自体を主な対象として、線の表現、形の呼応、線や文字の流れなどを観点とし、第3章では散らし書きの空間構成を観点とした。特に散らし書きの分析にあたっては、その構図を読み解く新しい理論を提案した。第4章と第5章は、高等学校での実践研究である。第4章は、漢字仮名交じりの書を主題とし、「擬似的卒意」の手立てによって日常の銜いのない書き振りを書作品へと昇華するモデルを提案した。これを「書における言文一致」と名付けた。第5章は、書道と音楽の合科教育実践であり、グループワークによる書と音楽のマルチメディア・アート作品の制作と発表の単元学習を取り上げた。2002年の取り組みであるが、今日の教育課題への対応を先取した実践として今も価値を有することが、現職教員や教職課程の在学学生を対象とした調査から示された。クリエイティブなコミュニケーションの様子をエスノメソドロジーによる会話分析からも確認した。その他、第1章で位置付けた書を生かした芸術表現として、2000年代初頭に作品発表した、映像や音楽、ストリートダンスや大掛かりな仕掛けの演出などを含めた総合芸術パフォーマンスの実践等を報告した。